

開催報告

第64回全国家の光大会

～対話でつくろう地域の未来 みんなでつなごう協同のころ～

第64回全国家の光大会を令和5年2月17日、京都府・国立京都国際会館で開催し、愛読者代表やJA教育文化活動関係者など約1,000名が参加しました。3年ぶりの実開催、また第8回大会以来59年ぶりの京都大会となりました。

全国家の光大会前日には、東・中・西日本の3地区に分かれて都道府県代表体験発表大会が行われ、「記事活用の部」「普及・文化活動の部」に、都道府県代表者合わせて58名が臨みました。それぞれがJA・地域に根ざした活動を発表しました。

そして、翌日の全国家の光大会では、都道府県代表体験発表大会で選出された9名それぞれが会場で発表しました。審査の結果、「記事活用の部」は福島県JAふくしま未来の本田恵子さんが志村源太郎記念賞(発表内容は『家の光』6月号に掲載)に、「普及・文化活動の部」は福岡県JA糸島の岡崎伸子さんが全国農業協同組合中央会会長賞に輝きました。

ここでは、「普及・文化活動の部」で家の光協会会長特別賞に選ばれた3人の発表を紹介します。



- 家の光協会会長特別賞
- 全国農業協同組合中央会会長賞

糸島の愛とパワーをお届けします！



福岡県
おかざきのぶこ
岡崎伸子(53)

所属JA JA糸島
所属部署 営農部 営農企画課
組合員数 16,522名(うち正組合員5,348名)

糸島市は、福岡県の北西部に位置し、古くは弥生時代に伊都国(いとこく)があり今もなお自然豊かな環境を保っています。その恵まれた大地の下でJA糸島は、多様な農畜産物を生産しています。私の担当するJA糸島女性部は、正組合員家庭と准組合員で活動に賛同される女性で構成されています。総数4159名の部員と趣味のグループ・共同購入グループなど152グループすべてが一番星でキラキラと輝いています。

近年、「いつまで我慢したらよかとかいな」、「もうみんなと会いたかっちゃけどねえ」と女性部員の声が届きます。そうです！ 新型コロナウイルス感染拡大は、私たちの暮らしを一変させました。これまでの活動ができない。集まることもできない。女性部役員と、コロナ禍でもやりがいのある活動はできないかと話をするのが多くなりました。そして、私たちの活動のヒントは『家の光』にあることを実感することが増えました。

女性部役員と話をする中で『家の光』2021年5月号掲載の「SDGsを探しにいこう！」が思い浮かびました。学生の「食」を守るという記事です。近隣の大学生にコロナ禍の状況を聞いてみると「アルバイトの時間が短くなって収入が減りました」や「節約のため食費を減らしました」などの声が上がりました。ふる里を離れ学業に励む子どもや孫が食べることに困っているとしたら、女性部員はどう考えるのでしょうか。また、『家の光』2021年9月号掲載の「食品ロスを減らすワザ」から、食品ロスが年間600万トンもあることを知りました。女性部の力を合わせると新たな活動ができると考え、「食」の支援について何度も話し合いを重ねました。

まず、2021年10月には「いとしまこども食堂ほっこり」に食材と調理の支援に、寄贈する『家の光』と『ちゃぐりん』を持って参加しました。ボランティアには大学生も参加しています。そのときに集まった食材で食育を学ぶ活動は、大学生との会話も楽しく、人参の皮を剥いただけで拍手をされ、野菜たっぷりの豚汁に感激、生姜ゼリーに驚いてもらって女性部の調理支援は大好評です。「食と農」を通じた大切な時間を一緒に過ごす仲間の職員は、心強い味方です。使いきれなかった食材は、九州大学寄宿舍の学生に余すことなく届けています。

なぜ、JAが無償で食材支援をしているのかと多く質問を受けます。そのとき「1人はみんなのために、みんなは1人のために」だと痛感することができています。

ここで『ちゃぐりん』の登場です。小島よしおさんの「OH! 農英会話レッスン」が、留学生との会話に活躍しています。胡瓜はキューカンバー、茄子はエッグプラントだと読んでいたおかげで話が身近になる教科書に助けられました。

留学生との会話に「食農英会話レッスン帳」を作ってみました。近い将来、食と農を英語で楽しむ女性部員の姿が楽しみです。また、急な料理の質問にも答えることができるように『家の光』から私の「マルチレシピ」を活用しています。そして、『家の光』単行本『プロに教わる 野菜の収穫・保存・加工の技とコツ』は職員が「食」の支援の農作業に活用しています。作付けや保存にと大地の恵みの食農教育を実践することもできています。

■ フードパントリー、市民や学生と絆

令和3年12月に始めた糸島市フードパントリーと九州大学フードパントリーを2日にわけて開催するために、女性部役員と農政協議会・生産部会協議会・青年部に協力依頼をしました。令和3年度には125万人が来店された、JA糸島の産直市場「伊都菜彩(いとさいさい)」の出荷者協議会へも相談しました。女性部では市民と学生に新鮮野菜を届けたいと大根・ブロッコリーを作付けしました。

令和4年12月には2回目となるフードパントリーをそれぞれに開催することもできました。今回集まった支援品は約13t! 皆さんからいただいた支援の愛は、糸島市民72世帯、大学生約1000人に届けることができました。食を通じて多くの方との絆ができ、やりがいのある活動になっています。さらに、JA組合員と糸島市民からの支援の申し出が増え、JAに足を運ぶ方が増えました。併せて「食」の支援ボランティア部ができていて活動に弾みがついています。

ここで1つ課題があることに気が付きました。

女性部活動は着実に前進しているものの、令和4年度の『家の光』購読部数が減少していることです。活発な活動と購読部数が噛み合っていない。そのこと

を女性部役員に相談しました。そして、私たちはさっそく『家の光』の見どころ・読みどころの紹介と、女性部活動の近況報告に数多く顔を出しました。そこからの『家の光』の購読は、女性部役員と職員が手を携え、私たちが同行せずとも女性部役員は率先して普及を展開しています。また、仲間の職員からも新規申込書が届いています。その甲斐あって2022年11月号の927部から12月号は50部増部の977部になりました。「心配せんでよかよ。私たちがついとうちゃけんね」のことばは、数字にはっきりと見えてきました。2月号には1000部を超えてきています。

また、グループ活動や文化教室のメンバーに健康や料理についての紹介を増やしたことで、記事活用グループを21グループ増やすことにも成功しました。1歩・2歩・3歩と『家の光』の仲間のあゆみは進んでいます。

食の支援を続ける中で、とても嬉しいニュースがありました。令和4年8月、糸島市とJA糸島が連携して、米価下落の影響を受けた農家支援のために令和3年産の糸島産米2700俵を買い取り、生活に困っている方や学生などへの支援を始めました。また、市内畜産農家の飼料高騰に対する支援にも活用されています。さらに、その支援米が女性部活動の「食」の支援の助けとなり、安心して「糸島市支援米」をお届けすることができています。

この1年の食の支援を振り返り、届けたお米は16t・青果7t・食品3t・マスクや生理用品などの日用品を合わせると合計約26tに上っています。

■ 出前授業再開、シニア交流講座も

そして、止まっていた小学生との交流も、以前より出前授業の依頼が増えています。小学3年生の授業では、古代米を使った「黒米おはぎ」を作りました。黒いお米に驚きながら「家でも作ってみたい」と152人の子どもたちは大喜びでした。さらに、『家の光』2022年9月号掲載の「ひもトレ講座」を参考にして、シニアの皆さんとの交流がスタート。コロナ禍で友達との会話が減って、テレビと会話をしていると聞き、ずっと元気でいてもらいたいと体と頭をちょこっと動かす「ちょこっとルーム」が人気の講座になっています。「糸島方言かるた」で笑いあい、脳トレクイズで頭を回転させ、紙芝居で昔を懐かしむ楽しい時間です。参加者を糸島市民にしたことで、『家の光』を読みたいと購読者が増えました。その他にも、生米パン作りや柿渋を使った手提げ作りなど『家の光』をみんなで楽しむことができています。

■ 女性部・職員の成長と『家の光』

できないことを悩むより、今だからできること、かたちを変えてできることを。

『家の光』をヒントに、J Aと頼もしい女性部と地域の人たちと一緒に取り組んだ活動が、こども食堂をはじめ、糸島市民や大学生への「食」の支援と食品ロス削減へと繋がりました。新たな活動のひとつに、J A・J F・商工会の女性部がそれぞれの特産品と一緒に販売して地域を盛り上げていこうと「糸島ルーバンマルシェ」も開催することができました。地域の女性部が一堂に会するこの取り組みは、全国的にも珍しいと思います。

若い世代や糸島市民・行政と協働する機会が増えたことは、女性部と私たち職員の成長と『家の光』が結びついたと実感しています。

これからも地域から愛され、活力溢れるJ Aをめざして、明るく元気いっぱいの糸島の愛とパワーをお届けします。

●家の光協会会長特別賞

「家活」で“つなぐ” ～「えっ！」からのスタート～



茨城県
ふるはし しげみ
古橋 成美 (52)

所属 J A J A北つくば
所属部署 総務部 企画開発課
組合員数 22,819名(うち正組合員 15,149名)

2人の子どもの大学生となり、家を出てアパート生活、子育ても一段落かなと思った2021年春。私の人生を変える「えっ？」が起きました。「総務部企画開発課 子育て支援センター長？」突然の人事異動です。それまでの私は信用事業13年、共済事業15年と金融業務ばかり歩いてきました。

「女性部担当？ 教育文化活動担当？ 子育て支援担当？」「え？ 何？ 何をやるの？」 恥ずかしい話ですが、女性部活動に関して知識が無いに等しい私が、当 J A 管内8地区をまとめる本部の事務局となったのです。

さて、茨城県は皆さんご存じのとおり、魅力度ランキング最下位の常連ですが、出荷量・産出額全国1位を誇る農産物がたくさんある農業県でもあります。

そして、J A北つくばは関東平野のほぼ中央、名峰、筑波山を望む茨城県の南西部に位置しています。関東ローム層の豊かな大地、恵まれた環境が、米をはじめとし、白菜・トマト・こだま西瓜など、100種類を超える農畜産物を産出しています。

J A北つくばの女性部は現在部員数1895名。本部役員組織を中心に行う「統一活動」、管内8地区により行う「地区活動」の他、趣味のグループ活動「夢サークル」、女性大学「なでしこスクール」、「フレッシュミズ」を主な活動としています。

コロナ禍以前は女性部員が講師となり、『家の光』『ちゃぐりん』を活用した工作や親子料理教室、支店ふれあいイベントに加え、1年の締めくくりには盛大な「文化活動発表会・家の光大会」を開催。女性部員の歌やダンスが賑やかに行われ、各地区代表による家の光記事活用発表・記念講演など、様々な活動を行って

いました。

そして、本店事務局のもう1つの役割には、『家の光』の普及推進があります。「少しでも『家の光』を身近に感じてもらいたい」と、2019年より、8地区の女性部長が集まる会議の中で、『家の光』2019年11月号の「押し花お薬手帳ケース」づくりや、『家の光』2019年12月号付録の「家の光家計簿」や「未来にのこすわたしノート」を活用した勉強会を実施。各地区の活動につなげました。

■ 炊き出し訓練など屋外活動始める

しかしコロナ禍になって、活動が全くできなくなりました。何かできることはないかと考え、「小さなことでもできることから始めよう」と、新たに屋外での活動として、2020年から災害時を想定した「炊き出し訓練」や地域貢献に向けた「清掃ボランティア活動」を始めました。

当JA管内も12年前の東日本大震災や2019年の台風19号で大きな被害を受けた地域です。「炊き出し訓練」は、「災害時に地域の生活を守るための、安定した食料供給」を目的としました。

訓練では、羽釜と薪でご飯を炊き、『家の光』2020年9月号付録「もしも…に備える災害食レシピ」を活用した「即食レシピ」を作り、女性部活動を理解してもらうため、職員にも食べてもらいました。また、各地区への配送訓練を行い、みそ玉やサバ缶を使った災害レシピにもチャレンジしました。2022年度は各地区女性部と事務局が協力し、『家の光』を参考に、北つくば女性部オリジナルの新しい災害レシピや、お湯ポチャレシピも作りました。なお、炊き出し訓練に使う釜や鍋などは、共済連の「くらしの活動経費助成金」を活用して購入しております。

今後は、行政とも連携し、地域の災害訓練に女性部が参画して、炊き出しの食事を提供できるようにしたいと思います。女性部による継続した訓練が「食」の地域貢献に繋がります。

「清掃ボランティア活動」では、「地域に密着した住みよい社会づくり」を目指し、地域の清掃を行うことで、部員同士のつながりを深めました。全員でお揃いの青いベストを着用し、地域へのPRも兼ねて、女性部の旗とトングを持って活動開始。部員同士、会話もしながら歩くことで、健康増進にも繋がります。歩くことが困難な部員には途中の休憩所でのお茶出しなどを依頼し、全員参加の活動としました。

■ 親子イベントで次世代ファン作り

そして2022年度。活動が徐々に再開となる中で、女性部独自の「『家の光』普及活用運動要領」を作成。地区ごとの増部目標を掲げ、20～40代の「フレミズ

世代」、40~50代の「ミドル世代」、そして現在、女性部活動の中核を担う「シニア世代」と、世代ごとに対象を分類して『家の光』普及運動に取り組みました。

まず「フレミズ世代」へは、私のもう1つの担当である「子育て支援センター」が結びつくのでは、と考えました。当センターでは、11名の職員を子育て支援研究員として委嘱をし、常駐する2名の保育士と共に「次世代のファンづくり」を目的に、地域の親子向けイベントを開催しています。

私が担当となってから、センター内に、「子育て応援コーナー」を設置。子育て世代向けにJA事業を伝えるチラシと一緒に『家の光』を置き、目に留まるようにしました。簡単・時短料理や、針や糸を使わない手芸など、忙しい子育て中のお母さんたちに興味がありそうなページを紹介しています。

また、子育てイベントでは、女性部員による地産地消料理を提供し、子どもたちからも大盛況。さらに「家活」での部員手作りのエコバッグやマスクがプレゼントされ、大変喜ばれました。

現役部員と子育て世代のマッチングが、フレミズへの加入、さらに将来の女性部員へとつながります。別の世代同士の交流は、「家活」にも自然と結びつき、『家の光』の普及も含めて大きな効果につながりました。

現在、活動の中心である女性部員へは、地域貢献・健康増進・「家活」を主な活動と考え、2022年度には3回講座の女性部勉強会を新たに開催しました。

1回目は家の光協会を講師に迎え「SDGs講座」を学び、「家の光手芸教室」、「ごぼう体操」を行いました。2回目は「フードロスと貧困問題について」、3回目は他部門連携の一環として、職員が講師となり、「食の安全について」の講座を行いました。さらに「健康体操講座・スクエアステップ体操」と、どの講座も女性部活動との関わりが深く、今後も勉強会を続けてほしいとの声がありました。

■「家活」楽しみながら活動充実

それぞれの世代、組織の活動を充実させるために「家活」を楽しんで行うことを意識した結果、12月号からの年間購読で、39部の純増となりました。

「ミドル世代」への普及は、これまで私が普及活動してきた中で、非常に難しい世代となりますが、所属部署にて担当する「次世代農業研究会」、「相続相談サポート」が普及のきっかけに、と考えました。

「次世代農業研究会」は、若手農業者が、共に地域農業の発展を目指すことを目的として、年6回研修会を行っています。その中で『地上』の記事を紹介し、メンバーの家族向けに『家の光』、『ちゃぐりん』の案内にて、普及への取り組みを始めています。

「相続相談サポート」では、管内の組合員からの相続相談に対応しています。今後、『家の光』別冊付録「わたしノート」を活用し、職員が講師となり、普及の

取り組みとして、学習会の開催を計画しています。

さらに、女性部活動や「家活」に関心の薄いＪＡ職員から、普及への意識を高めることも重要です。現在、女性部規約改正の協議を行っており、改正後は先進ＪＡにならい、女性職員グループを立ち上げ、「家活」を通じて、女性部活性化と『家の光』普及につなげたいと考えています。「ミドル世代」と女性部、そして「家活」へと、どのようにつなげ、理解を深めてもらうのか、これからの大きな課題のひとつです。

女性部の活躍がこれからの地域を支え、ＪＡを支えていきます。女性部活性化の方法として、ＪＡ北つくば女性部では、これからも「家活」に取り組んでいきます。「えっ？」から始まり、ようやくスタート地点です。新生女性部へ向けて、ここからが本番です。

●家の光協会会長特別賞

咲かせよう！ 仲間の輪『家の光』の輪



岐阜県
たかはし みほ
高橋 美帆(28)

所属JA JAいび川
所属部署 総務部 企画管理課
組合員数 14,850名(うち正組合員7,989名)

「赤いガーベラ」の花言葉はご存知でしょうか。「チャレンジ」・「限りなき挑戦」です。私のやりがいは「女性部員の『やりたい』を叶える」ことと、「新しい取り組みに挑戦する」ことです。私は入組してから現在まで女性部活動を含む生活指導を担当してきました。1年目は経済部で生活指導、2年目は営農部で食農教育活動、3年目は販売部でフレッシュミズ活動を学び、そして4年日以降は総務部において、今までの経験を生かし、JAと女性部のつながりづくりに取り組んでいます。本日はその中から三つの「つながり」を紹介させていただきます。

■ 女性部「だより」から「LINE」へ

〈女性部員とのつながり〉

1つ目は「女性部員」とのつながりです。現部署の配属となり、心新たに活動していこうとしていた矢先に世界中を混乱させた新型コロナウイルスが感染拡大しました。全ての女性部活動が中止となり、恐れていたことが起こりました。女性部員の『女性部離れ』です。コロナ前と比べると女性部活動の参加者が20%以上減少し、ある部員から「女性部活動が衰退してしまう」「会えない状況でもつながりを持ちたい」と相談を受けました。

そうは言っても……と困っている私に、女性部長の「できないとあきらめるのではなく、できることからはじめよう」という力強い言葉に背中を押していただき、一部の食農教育活動を再開しました。また、家にいてもJAと部員をつなぐツールとして『女性部だより』を発行しました。部員からは、「私たちが大事にし

ていた活動を続けてくれてありがとう」という言葉をいただきました。

しかし、ここで壁にぶつかります。紙媒体での『女性部だより』ではコスト面、情報量、記事の鮮度が良くないという点です。そこで、新たに挑戦したのが『JAいび川女性部LINE』の開設です。配信する情報は、まさに「今」であり、部員の反応も格段に良くなりました。しかし、安心していたのも束の間で、再び壁にぶつかってしまいます。なんと、約半数の部員が「スマホを持ってんだけど使い方がわからない」ということでした。それでも乗り越えられない壁はないと私は諦めません。JA主催の「スマホ教室」を開催し、登録率は42%まで上がりました。「これで私もLINEを使えるよ。メッセージ待ってるね」と嬉しい声をかけていただきました。現在は、多くの方が利用され、『家の光』の記事を活用して実際に私が作った手芸や料理をはじめ、食農教育活動、女性部活動の様子を定期的に情報発信しています。

今後は、一方的にメッセージを送るだけではなく、対話のツールとして活用していきたいです。

■ 食と農基軸に組織的な取組みを

〈職員とのつながり〉

2つ目は職員とのつながりです。支店統廃合や営農経済業務の集約により、生活担当者が不在となったことで、職員の生活指導関係の業務と普及・文化活動に対する意識が徐々に薄れ、主体的な姿勢が見えなくなりつつありました。

このとき私は「JA離れが増えてしまうのではなく、JA自らが組合員や女性部員から離れているのではないか」と考え、課内でJAとして活動のあり方、位置づけを明確にする必要があるのではと提案しました。その結果、中央会の指導のもと、食と農を基軸とした活動である「あぐりん活動」を、役職員を含めた地域全体の取り組みとして組織的に進めることにしました。

「あぐりん活動」のポイントは3つあります。1つ目は、支店長をあぐりんプランナー、担当者をあぐりんリーダーに任命し、支店単位での活動を展開。2つ目は、担当者の意識向上を目的とした研修会の開催。3つ目は、PDCAサイクルに基づく活動の実施によって組合員・利用者・女性部員との関係性の再構築を図ることです。

研修会では、食農教育活動や生活文化活動、『家の光』の普及活動など、様々な取り組みの意義とその役割について確認しました。支店を中心にした「あぐりん活動」の輪は広がり、「JAと地域の皆さんをもっとつなげたい」という意識が職員の行動に現れるようになりました。

行動の変化は『家の光』の普及活動にもつながることになります。「心豊かに生き生きとした生活を『家の光』と共に」を合言葉に、全支店で普及活動が開始。あ

ぐりんリーダー手作りのオリジナルPOPを店内に掲示し、来店者へPRしました。また、掲示だけではPRが不十分じゃないかという意見から、未購読者をリストアップして直接声かけをするなど、これまでやらされていたことを、自分たちで案を出し合い行動する方向に変わっていったのです。直接お話しをして『家の光』を紹介することで、「面白い記事がたくさん！」と興味をもっていただける方もおり、約1ヶ月の活動で32名の方に新規購読していただくことができました。結果として普及率をプラスに転じることはできませんでしたが、ここ数年5%程度の減少が続いていた減少率を1%程度に抑えることができました。

■ JAとフレミズをつなぐ『家の光』

〈フレッシュミズ(次世代)とのつながり〉

3つ目は次世代とのつながりです。『家の光』の普及活動を行う中で、新たな活動の広がりを感じたものがあります。それは、『家の光』の記事を活用したフレッシュミズ活動です。

令和2年に実施した「簡単親子みそづくり教室」の参加者にフレッシュミズ活動への参加を呼びかけたところ多くの方に賛同いただき、新たなグループを結成しました。1年間の活動を経て2年目の活動計画を立てる際に、メンバーの1人が『家の光』を見て、「夏野菜の栽培がうまくいなくて、誰かに教えてほしい」という一言が私の「やりたいことを叶えるボタン」を押しました。

2ヶ月後「野菜づくり講座 コンパニオンプランツ」を開催し、講師はプロ中のプロである当JAの営農経済担当常務が担当しました。参加者の「やってみたい」をすぐに実行に移せるフットワークの軽さがJAいび川のいいところです。さらに「栽培過程も相談したい」という「やりたい」を受け、電話やLINEなどの相談体制を整えました。互いに収穫までの過程を共有することで、より一層メンバー同士の親睦を深めることができました。

ここで思いがけない嬉しいことが起こります。当JAの女性部大学では、毎年『家の光』の記事を活用した手芸講座を行っているのですが、今年度はフレッシュミズメンバーの1人が講師となり開催することになりました。

“得意な手芸を活かしたい”というメンバーの“やりたい”を叶えることができました。JA活動を通じて、メンバーの想いや願いを実現できることの嬉しさを感じるとともに、フレッシュミズメンバーとJAをつないでくれた『家の光』に大きな可能性を感じた瞬間でした。

今までの取り組みを思い返すと、私たちの隣にはいつも『家の光』がありました。ある時は女性部活動の先生として、またある時は部員同士の共通の話題として、そして新たな出会いをつくってくれる存在です。協同の力で豊かなライフスタイルを目指す『家の光』は必然的に人と人を繋ぐ力があります。これからも組

合員や女性部員の皆さんに『家の光』の魅力伝えて仲間の輪を広げていきたい
と思います。

「さあ！ ここから！」 ガーベラの花言葉のように、私は挑戦し続けます。

